.あまとうのみつばち

白坂　ゆのる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
・あまとうのみつばち

【Ｎコード】
Ｎ３６８５Ｃ

【作者名】
白坂　ゆのる

【あらすじ】
甘すぎる、まるで砂糖のような日々をえがいてみました。

砂糖をいれすぎた、あまったるい紅茶をひとくち、口にふくんでそのままのどの奥へと流しこんだ。
うっくん、とのどが鳴る音が聞こえてくる。
ぼくは一回、オレンジ色の水面をながめてから、ぶすっとした顔を作った。
「さとう、いれすぎですよ」
「そーお？甘いほうがすきかとおもって」
せんぱいはにこっと笑って、角砂糖をひとつ、くちのなかに投げ入れた。
しゃくしゃくと、角砂糖がたべられていく音がする。
「糖尿病、になりますよ」
「じゃあ、かずくんもなれば？」
「いやです」
断固として拒否しても、せんぱいはいやな顔ひとつせずにぼくをみつめている。
その瞳には好奇心というか、たのしそうな光がちらついていた。
「あたしは、あまいものだあーいすき」
ぼくの非難の目をもろともぜずに、せんぱいはおおっぴらに手を広げて見せた。
「かずくんは？」
「きらいです」
ぼくは未だにぶすっとして即答する。
せんぱいのペースはいつもこうだ。
下をむいていると、ふんわりとした手が、ぼくのほおをつつんで、ゆっくりとやわらかいものが、ぼくのくちびるを包み込んだ。
そして、そのままふんわりとあたたかいものが名残おしいくらいに離されていく。

・

頭が、からだぜんたいが熱くなっていくのが自分でもわかる。
砂糖がとけるまえに蒸発して、ぼくがとけてしまいそうだ。
砂糖の甘い、きれいなあじがした。
「あまいもの、きらい？」
せんぱいは勝ち誇った笑みをうかべて、ぼくを見つめていた。
「…ずるいですよ」
あとの祭り。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3685c/

.あまとうのみつばち

2010年10月17日02時42分発行